



2015年(平成27年)
8月14日(金)
(旧暦 7月1日) 先勝

デリー東北新聞社
〒031-8601 八戸市下町1丁目3-12
☎0178-44-5111
©デリー東北新聞社2015

もう一つの学校

八戸あおば高等学院から

今春、八戸あおば高等学院を卒業したB子さん(18)は、首都圏の大学に通う女子大生。高2で不登校になり、学校にも家にも居場所がなくなったが、あおば学院の教師らに救われた。「不登校になった経験がなければ今の自分はなかった」。過去を受け入れ、しっかりと歩を進めている。

(玉川那津美)

精神保健福祉士目指す卒業生

現在、アルバイトをしながら福祉系の4年制大学に通っている。夢は精神保健福祉士。精神的障害や心に病を抱える人々が社会復帰できるように、支援や訓練の手助けをする。医療、保健、福祉の分野にまたがり重要な役割を担う精神科ソーシャルワーカーだ。

この職業を目指すようになったのは理由がある。

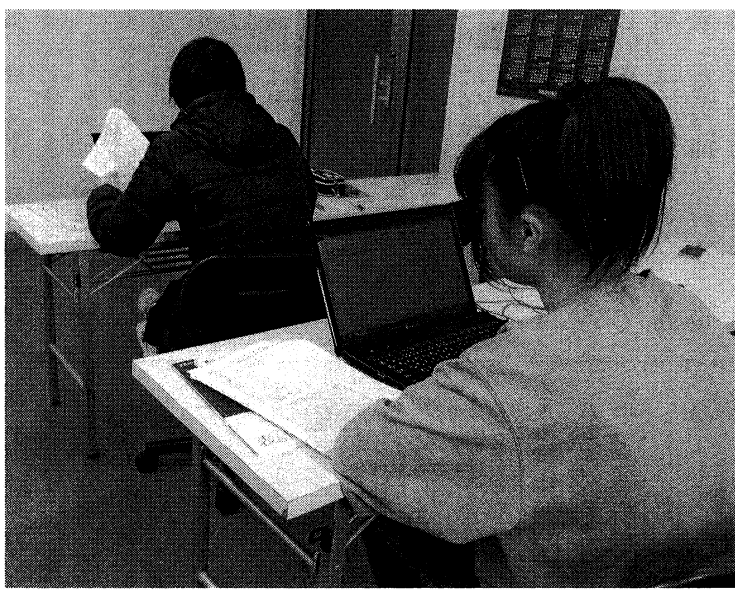
八戸市内の中学を卒業し、高校は進学校に進んだ。仲がよい友達もできて平穏な毎日を送っていた。

しかし、高2の夏にそんな日々は一転する。突然、声が出なくなった。話したいのに、言葉が出ない。それが原因で精神

「不登校経験し今がある」

的に追い詰められていった。自分の教室に入れず、保健室に通った。「辞め

た。たければ辞めれば。養護教諭の心ない言葉に、登校すらできなくなった。家では親とも話さず、



八戸あおば高等学院に通っていたころのB子さん(手前)。「今までのこと全てが自信になった」と前を向く

愛犬、先生に救われ回復

関係は悪くなった。「お前は精神障害か何かだ」と決めつけられ、精神科に連れて行かれた。そのころ、家族が犬を知り合いから譲り受け、生後5カ月ほどの子犬だった。「お前が育てろ」と言われた。でも、どうすればいいかわからず、何もできなかった。子犬はどんどん弱っていく。このままではいけないと思い、世話を始めた。

子犬は自分を慕って、どこにでもついて来るようになった。2階の部屋で一人泣いていると、1階にいたはずの犬が部屋にきて慰めてくれた。言葉は交わせないが、お互いの気持ちを理解できている気がした。犬と触れ合うことで、少しずつ単語を声に出して言えるようになった。

病院では、カウンセラーと会話をせず、ただ一緒に時間を過ごすだけの時もあった。逆にそれが

心地よかった。カウンセラーは、話さなくとも進路や学校のことでも苦勞しているんだらうなど理解してくれて。高校の養護教諭や家族というよりずっと楽だった。

高2の秋、ようやく声が回復した。ただ、元の学校には戻らず、あおば学院に移った。毎日通い、勉強に励んだ。それでも親との関係は相変わらず。「進学校に入学したのに辞めて、犬とばかり遊んで」。酒に酔った父に殴られたり、仕事で気に入らないうことがあった母に八つ当たりされたりした。弟の反抗期も重なり、家では両親がヒリヒリしていた。

自然と家には帰らなくなったり、歩き回ったり、友達の家に入り浸ったり。家を抜け出す時間だけが楽しかった。それでも、誰もいない時間帯を見計らって犬に会い

に行った。触れ合っていると元気になった。

「今までのこと全てが自信になったから、これからどんなつらいことがあっても大丈夫って思える」

この企画への意見をお待ちしております。取材をお願いする場合がありますので、連絡先を添えてください。断りなく氏名などを紙面に掲載することはありません。宛先は、〒031-8601(住所不要) デリー東北報道部「あおば学院取材班」へ。ファクスは0178(45)5900、電子メールアドレスはaoba@daily-tohoku.co.jp

子どもも育む

毎週金曜日に掲載